

卒業生におくることば

田畑 雅英

卒業生の皆さん、そして大学院修了生の皆さん、ご卒業・ご修了おめでとうございます。また、ご家族の皆さま、ご関係の皆様にも心よりお慶びを申し上げたいと存じます。今回は久しぶりに入場制限を解除することができ、皆様にも卒業生の門出を直接見守っていただけますことを大変うれしく存じます。あわせて、お忙しい中をご臨席賜りました来賓の皆様にも厚くお礼申し上げます。

今年の元旦には能登地方を中心に大きな地震がありました。被害に遭われた皆様には心よりお見舞い申し上げます。

卒業生の皆さんが学生生活を振り返るとき、きっとコロナ禍のことは忘れることができないと思います。とくに4年間本学で学んだ皆さんは、最初の2年間はコロナ禍の只中で、入学式も行なうことができませんでした。授業形態もそれまでと大きく変わり、オンライン授業が主体となって、戸惑った方も非常に多かったことと思います。課外活動も大きく制限せざるを得ませんでした。これらは学生の皆さんの安全を第一に考えてのやむを得ない措置ではありましたが、こうしたさまざまな困難や制限の中で努力して授業や課外活動に取り組み、本日までたくご卒業を迎えられた皆さんには、心から敬意を表したいと思います。授業形態こそ従来と異なるとはいえ、必要単位数その他の卒業条件は従来とまったく異なりません。その意味でも、皆さんには誇りと自信をもって卒業していただきたいと思えます。

さて、本日卒業していく皆さんにはなむけの言葉として申し上げたいのは、「一つ上、二つ上の帰属意識を持ってほしい」ということです。「帰属意識」とは、とくに企業に関してよく使われる言葉ですが、ここではより広く、自分がある集団に属しているという意識のこととして考えてみます。例えば、自分は日文の学生である、と考えれば、学科生として、日本語日本文学科に帰属意識を持っていることになります。同じ学生が、自分は学芸の学生である、と考えれば、学部生として、学芸学部で帰属意識を持っていることになります。また同じ学生が、自分はサガジョの学生である、と考えれば、大学生として、相模女子大学という大学に帰属意識を持っていることになります。他の学科の皆さんも、それぞれ同じように考えてみることはできるはずです。このように、人は同時に複数の重なり合う帰属先を持っており、そのどれかをほかの帰属先より強く意識しているのが普通です。そして多くの場合には、かなり身近な、親しい人たちの集団により強く帰属意識を持つ傾向があるように思います。それを一段高い、または一段広いところにシフトしてみることで、ずいぶんものの見方や考え方が変わってくるように思うのです。

皆さんも社会に出て、会社・企業に勤めると、さまざまな「研修」を受けなければならなくなると思いますが、相模女子大学も例外ではありません。私は教員として相模女子大学に

勤めていますが、実は過去に事務の管理職を兼務していた時期があり、そのころには私も何度か職員研修を受けました。その中でたびたび聞いたのが、実際より一段上の立場で物事を見るように、ということです。例えば課長なら部長の立場で、部長なら局長の立場で物事を考えてみるように、ということです。それによって他の課や部も含めた広い視野と、より全体的な戦略のようなものから物事を考えることができる、という趣旨だったように思います。

卒業にあたって、それぞれのテーマで卒業研究に取り組んだ方も多いと思います。数年前に、私の担当する卒業研究のクラスで『セーラームーン』を中心に、アニメなどに見られる女の子の変身について、ヒーローものなどの男の子の変身と比較しながら考察した卒業論文を書いた学生がいました。「女の子」「男の子」によって類別することには場合によって問題がないわけではないかもしれませんが、それはともかくとして、その論文は、男の子（男性）が変身して戦う場合は、その動機や理由は「正義のために」「平和のために」といった抽象的で理念的なものになる傾向が強いのに対して、女の子が変身する場合は、家族や友人や恋人といった身近な人のために戦うというケースが多いと論じていました。なかなか興味深い内容の論文でしたが、そのように割り切れるかどうかはともかく、帰属意識が身近なところ、最も濃密に感情を交しているところにまず置かれるのは、ある意味ではごく自然なことであり、当然なことだと思います。それを否定することはできませんし、それを捨て去る必要はもろくないと思います。

しかし、そこだけにとどまっているとどうでしょうか。変身ヒーローや戦うヒロインが、自分の家族だけを守って、他の人たちがどんなにひどい目に遭っていても知らん顔というのでは困ってしまいます。変身ヒーローや戦うヒロインでない私たちにもまた、ある意味では同じことが言えるでしょう。

帰属意識を一段、さらに一段と上げていくことは、先ほど述べた仕事の面でもそうですが、人としての基本的なあり方において、さらに重要なのではないのでしょうか。自分の家族や一家から、近隣のコミュニティや、より広い地域社会へ。また、日本から、アジア、さらに世界へ。そのたびに、自分の帰属意識を置く集団は、多様性を増し、自分とは異質な要素を含むようになっていきます。それを排除するのではなく、理解しようと努めていくことはきわめて重要だと思います。そうすることによって、「身近な人のために」とは大きく隔たっているように見えていた「平和な世界の実現のために」といった、正しいとは思っても実感が伴いにくい目標も血の通ったものとなる手掛かりが生まれるのではないのでしょうか。

何だか大きな話になってしまったようですが、まず一人ひとりの意識の中で、考え方を組み直す思考実験のように取り組んでいくことが大切だと思います。皆さんが、より広い視野をもち、より深い寛大さをもって、自己も他者もともに大事にしながら社会の中で活動し、それぞれの人生をしっかりと生きていくことを期待しております。

専門職大学院社会起業研究科の修了生の皆さんにも一言申し上げます。過日、本村賢太郎相模原市長が直接来学されて、社会起業研究科の授業に出席され、受講生に課題を出される

ということがあり、後日その解決提案のプレゼンテーションが本村市長の前で行われました。別の機会に本村市長にお目にかかった時、市長の方からその話を持ち出されて、「提案は非常に興味深かった。実現性のあるものは実現していきたい」とおっしゃいました。私も非常にうれしく、誇らしい思いがしました。このことにもあらわれているように、皆さんは大学院での研鑽によって着実に力をつけていると思います。大学院修了後、学んだ知識や方法を十分に活かして、地域と社会に新たな展望を示し、活力をもたらしてくださることを、大いに期待しております。

以上をもちまして、卒業生におくることばといたします。